

シュレーベルトを

びく物理学学者

日本でのハイゼンベルク



ハイゼンベルク教授

「今までの歴史の上にはいくつもの黄金時代があった。たとえば、十五、十六世紀にイタリアに起こった美術の黄金時代、十八、十九世紀ドイツの古典主義の音楽、そして現代はまさに原子の黄金時代である。このような黄金時代は、そのハローネーの存在するところによって達成されるものであって、この次の黄金時代がいつ、どこに生まれるかは予測できない。それは日本かも知れない。あるいは他の国かも知れない。さて今晩は、今から五十年前の音楽の黄金時代のシュレーベルトの作品を、五分の四の日本人の音楽家と、五分の二のドイツ人のハローネーについて演奏するのだ。音楽は世界を結び、喜びを与える芸術ではないか。」

「今までの歴史の上にはいくつもの黄金時代があった。たとえば、十五、十六世紀にイタリアに起こった美術の黄金時代、十八、十九世紀ドイツの古典主義の音楽、そして現代はまさに原子の黄金時代である。このような黄金時代は、そのハローネーの存在するところによって達成されるものであって、この次の黄金時代がいつ、どこに生まれるかは予測できない。それは日本かも知れない。あるいは他の国かも知れない。さて今晩は、今から五十年前の音楽の黄金時代のシュレーベルトの作品を、五分の四の日本人の音楽家と、五分の二のドイツ人のハローネーについて演奏するのだ。音楽は世界を結び、喜びを与える芸術ではないか。」

c073-001-046

「今までの歴史の上にはいくつもの黄金時代があった。たとえば、十五、十六世紀にイタリアに起こった美術の黄金時代、十八、十九世紀ドイツの古典主義の音楽、そして現代はまさに原子の黄金時代である。このような黄金時代は、そのハローネーの存在するところによって達成されるものであって、この次の黄金時代がいつ、どこに生まれるかは予測できない。それは日本かも知れない。あるいは他の国かも知れない。さて今晩は、今から五十年前の音楽の黄金時代のシュレーベルトの作品を、五分の四の日本人の音楽家と、五分の二のドイツ人のハローネーについて演奏するのだ。音楽は世界を結び、喜びを与える芸術ではないか。」



湯川博士

湯川博士が素領域理論

空間の極限設定

非局所場論を発展さす

京都大学基礎物理学研究所長湯川秀樹博士は、この八月アメリカのロチェスターで開かれる国際シンポジウムに出席し、同グループを率いてきた「素領域理論」と呼ばれる新理論を発表することになった。この理論は、かねてから同博士が提唱してきた非局所場の理論を発展させたもので、物質の極限である素粒子の世界を統一するものとして注目されている。昨年「日本理論物理学の進歩」の朝永振一郎博士還暦記念号に掲載され、さる七日、仙台で開かれた日本物理学会でも発表された。

物理学者は、物質をどんなに細かく刻んでいくと、その究極の本質は何だろうか、という疑問に絶えず取り組んできた。これまでの「量子論」では、物質の最小構成単位である素粒子を、運動量を持つ空間的な点と見做し、形はないものと考えた。しかし、この考え方は、素粒子の質量や電荷が無限大に発散するところの「素領域理論」で、理論を前進させる正面からの

「素領域理論」で、理論を前進させる正面からの

「素領域理論」で、理論を前進させる正面からの

c073-001-047